オリカルクムの記憶

二　五月の嵐

峯村　明

オリカルクムの記憶 2

登場人物
五月の嵐
010.
011.
012.
013.
014.
015.
016.
017.
018.
019.
020.
あとがき
奥付

登場人物

竜門渕　めるの	湖畔の旧家、竜門渕家の後継者　１５歳
竜門渕　遠野	竜門渕家の現在の当主　めるのの曽祖母
河合　保ノ助	湖畔の温泉宿『かわいや』のせがれ　１４歳
かわいや	温泉宿『かわいや』の亭主
A.V.ラウレンス	ベルギー人の旅行者
おシゲ ／　源三	竜門渕家の使用人

五月の嵐

010.

竜門渕の船着場に立って深々と頭をさげるめるのに見送られ、保ノ助は帰途についた。親父に押し付けられた気のすすまない仕事だったが、思いのほか、いい思いをしてしまった。めるのおじょうさまがその曽祖母とは、まったく、似ても似つかない、気立てのよい娘であることは、大発見だった。だからといって何がどうなるものでもなかったけれども、保ノ助はほくほくとした気分で櫓を漕いだ。

とにかく、用事は済んだ。早く帰らにゃ……

昼過ぎにはあれほど穏やかだった天気が、どうも怪しい。祠の小島にいた時分から空がにわかにかき曇り、風も出てきた。ひやりと冷たい風。遅い昼飯を竹筒の水で飲み込んで早々に切り上げ、おじょうさまを船着場に無事送り届けてきた保ノ助だった。

どこで鳴くのか、けろけろ、けろけろとカエルの鳴き声が聞こえてくる。夕刻にはまだ間がある。カエルたちは雨が近いといって鳴いているのだ。

まいったな、こりゃ、と保ノ助は独りごちた。風は向かい風でしだいに強くなり、舟はなかなか進まない。おじょうさまを降ろした船着場へ引き返そうかと迷うが、すでに中間を過ぎたくらいの位置にまで来ている。もしも風が少し弱まってくれたなら、親父のいるわが家までもうひと頑張りで着くのだが……だがしかし……これ以上、風が強くなったら前に進めないどころか、舟は波立つ湖の中にひっくり返るかもしれない……

（まいった、というか、しまった、だわ、こりゃ）

もっと早くに引き返すべきだった。判断をすっかり、誤った。背筋を冷たい汗が流れ、額には脂汗がにじむ。汗ですべる櫓をつかみ直そうと、しっかり握りしめていた櫓から手のひらを浮かせた、その一瞬、まさにその時。保ノ助の正面から、どおおおうっ、と、すさまじい突風が襲ってきて、保ノ助のからだは一瞬、宙に浮きあがった。

突風とともに、波が来た。無我夢中で櫓を握りなおすが、いっとき力の緩んだ櫓は激しい波に抗しきれず、保ノ助の手から跳ねあがり、櫓を失った舟は大きく傾いだ。

やっちまった――

舟を壊したら親父がどんなに怒り狂うことか！　いや、親父の怒りの前に、明日の朝のシジミ採りができなくなってしまう。早朝のシジミ漁とシジミ売りは保ノ助の仕事で、『かわいや』の貴重な収入の一部であった。

親父――

すまねえ――

舟が傾いだ時、保ノ助の身も投げ出された。

舟に乗ることや釣りは好きだったが泳ぎは苦手な保ノ助だった。「もっと鍛錬しろや。なにかあった時じゃ、遅いに」という、親父の忠告を聞き流すんじゃなかった。湖上で風が出てきた際の判断の潮時を学んでおくんだった。あと、おじょうさまの手くらい、握っておくんだった。

いや、待てよ、と保ノ助は思った。こりゃあ、祠のお供えを食っちまった、バチかも――

あれもこれも後悔しつつ、保ノ助は波に呑まれていった。

011.

　夕食のお膳のあと片つけをしている時だった。おシゲがふと顔をあげた。「今、物音がしませんでしたか？」と。

「今夜はえらい、荒れてるねえ。ほら、雷さままで、ごろごろ鳴り出したよ。雨戸はしっかり閉めてくれたかい？　こんな晩は早いとこ、寝てしまおう」
　ひとり食後のお茶をすすりながら遠野は本をめくっている。

　夕食後とはいえ、時計は七時を回ったところで、晴れていれば五月の今ごろは、まだ明るい時刻だ。いくらなんでも寝るには早いと思いつつ、おシゲは逆らうことなくうなずいて、よっこらしょ、とお膳をもって立ち上がった。

　と、そこへめるのが廊下を走るようにやってきた。
「おシゲさん！　どなたか、見えたみたいよ！　ほら、門をたたく音が――」

　おシゲと遠野は思わず顔を見合わせ、耳を澄ました。「あらま！！　――ほんとだ！！」おシゲは持ち上げかけたお膳をあわてて下に置きなおし、玄関へ走った。

　外で門をたたいていた男は、蓑笠に、蓑、腰蓑と、蓑を全身にまとっていて、全身からぽたぽたと雨水を垂らしていた。
　お手伝いのおシゲに傘をさしかけていっしょに門を開けに出ためるのは男の顔を見て「『かわいや』さんじゃありませんか！」と思わず大きな声を出した。「どうなさいました！？」

『かわいや』亭主は肩で息をし、血走った目でめるのを見た。「あいすいやせん、める

のおじょうさん。おそれいりやすが、ご当主はご在宅で？」

　はい、おりますけど……とつぶやきながら、めるのの胸を不吉な予感がかすめた。宵の猛烈な嵐のなかをずぶぬれで駆けてくるとは、ただごとではない。

「とにかく、中へ！　ここは雨風が強いですから。さあ！」
　めるのは、恐縮する『かわいや』亭主の手をつかんで玄関に招きいれようとして、彼の背後の暗がりに、もう一名、いるのに気づいて、ぎょっとして悲鳴をあげそうになった。やはり全身を蓑で覆っている。身丈のある人影だ。

『かわいや』亭主はめるのが身をこわばらせているのに気づいて、あたふたと言った。「あっ！　そちらは、あたしんとこのお客でして！　あやしい人じゃありやせん！　せがれを捜すの手伝ってくれるとおっしゃって、ついて来てくだすったんですよ！」

「せがれ！？　捜す！？」雨風に打たれているのも忘れてめるのはおうむがえしに聞いた。「『かわいや』さんの息子さんて、保ノ助さんのことですか！？　保ノ助さん、どうかなさったのですか！？」

　亭主はなんとか落ち着こうと息を整え、つばを飲み込んで言った。「昼過ぎに舟で出たきり、帰ってこねえんです。今日はこちらのご当主のご用だったもんで、こちらでなにかしらご存じじゃなかろうかと、こうして……」

「帰ってない？　保ノ助さんが？　だってもうこんな時間、どうして――」

　めるのは、呆然自失。開け放された玄関の三和土（たたき）に仁王立ちした当主・遠野が一喝した。

「なにをやってるんだ、みんなで、そんな雨ンなかで！　中へ入ったらどうだい！」

012.

「あんたんとこのせがれがどうしたって？　あたしが何をご存じだって？」

　亭主はこれこれこういうわけで、と、先刻めるのにしたのと同じ話を当主に繰り返した。めるのは繰り返される話に、やきもきと気をもんだ。

「『かわいや』さん！　今日、あなたのとこの舟に乗せていただいたのは私です、祖母ではありません、祖母は家で臥せっていたのです！」
　めるのがようやく口をはさむと、『かわいや』亭主は、はた、と口をつぐんでめるのを見、遠野を見た。
「そ、そうだったですか――これはとんだご無礼を――」

「んなことはどうでもいいよ！　めるのや、おまえ、四時ごろには家に戻ってきたではないか？」

「ええ、おばあさま、お参りが済んだころ風が出てきたので、早々に引き上げてまいりました。『かわいや』さんの保ノ助さんはすぐに帰って行かれました。私、しばらく船着場でお見送りしていました……」

　頭上で、ごろごろごろ……と低く雷が鳴っている。『かわいや』亭主は言葉もなく、首をふってうなだれてしまった。竜門渕の船着場と『かわいや』近辺の船着場は舟で一時間もあれば往復できる。三時間も四時間もかかる距離ではないのだ。

　と、突然、地鳴りのような、気味の悪い音がして、いっしゅんあたりが明るくなった。続く、腹に響くような衝撃は、音なのか振動なのかわからない。おシゲが「ひゃあ

ああ」と金切り声をあげて、めるのに抱きついた。

「お、おばあさま〜」

「うむ、近くに落ちたらしい。こんなことしてても、しょうがない。みな、うちへあがりなされ」

「いやしかしご当主〜。うちのせがれが〜」

「こんな嵐のなかでなにができる！　せがれを捜そうにもこっちの身が危ないよ！　はよう、あがれっ！！　何度も言わせるでないわっ！！」

　老婆に雷を落とされ、『かわいや』亭主はしおしおと仰せにしたがうことにした。

013.

　さっさと上がれと急かされても、玄関は真っ暗である。先ほどの落雷で電気が来なくなってしまったのだ。みな、そろそろと手でさぐり、足でさぐりながら玄関に入ると、家の奥からロウソクの灯りが近づいてきた。

　別棟に住んでいるおシゲの亭主で、下働きの源三だった。停電に驚いて、母屋で困ってはいまいかと、提灯を灯して様子を見に勝手口から入って来たのだった。

『かわいや』の連れが三和土（たたき）で蓑を脱ぐのを見て、めるのは目を丸くした。背の高いその男は、外国人だった。

　おシゲはふたり分のずぶ濡れの蓑を乾かす算段をし、源三は客人を見て炭を熾し、火鉢に入れた。めるのはお茶を淹れようと、火鉢に鉄瓶を置く。指先が冷たい。そういえば外の雨も風も冷たかった。気のいい、あの保ノ助の行方が知れないことを考えると、指先の冷たさは、いっそう、増した。

『かわいや』と外国人の男に火鉢にあたるようすすめる。

「保ノ助さんは、どこか、そう、お友だちのところにでも立ち寄っている、ということは……」
　心当たりをすべてあたって、ここまで来たのだろうと思いながら、めるのは尋ねてみた。ここは町から一軒だけ、遠く離れている。

『かわいや』は小さく何度もうなずいて、「そもそも舟が帰ってきやせん。商売用の舟

なもんで、親の許しなしに使っちゃならねえ、そういうきまりになってます。……あいつは、頭はお世辞にもよかねえ、学校の勉強なんかまるっきり、ですが、そういうきまりはきっちり守るやつでして、今までにやぶったことは、それこそ一度も……」

　そう言って鼻水をすすりあげた。めるのも泣きたくなった。なにかしゃべっていないと、涙が出てきそうで、必死に話題を探した。

「舟を、それはそれは大事にしていましたわ、おとうさまの大事な舟だから、といって……」

　では、その大事な舟に乗ったまま、どこへ行ってしまったのだろう。

『かわいや』は「いやあ！」とはしゃいだような声をあげた。「おとうさまだなんて、滅相もありやせんや！　きまりごと守らなんだり、人のもんを手前勝手に扱った日にゃあ、俺のげんこつが飛ぶもんで。おっかなかっただけでしょうよ！」

　彼は、わはは、と大笑いし、鼻をすすってうつむいてしまった。

　部屋のふすまがさらりと開いて、遠野が入ってきた。めるのがすがりつくように見あげる。「おばあさま！　いかがでしたか！？」

　遠野は、うむ、とうなった。「『かわいや』さんや」

「へ、へい！？」

「嵐が収まったら、行ってみようじゃないか」

「へ――行くって――どこへ」

「あんたんとこのせがれは、湖におるようじゃ」

「――湖――」

014.

　遠野は、周囲の大人がちょんまげを結っていた時代に、将来この土地に鉄道がやってくると予言した人物である。いう事があまりにも突拍子もないので敬遠されてもいるが、代々の町長は事あるごとにお伺いをたてているというし、失せ物あて物を占って、その的中率の高さは魂消るほどだと『かわいや』もウワサには聞いていた。

『かわいや』がここ、竜門渕家にやって来たのは、保ノ助が昼間、当主にお目にかかっていたはずだったからだ。しかし、最初からここに来て尋ねればよかったかもしれなかった。遠野がそう言うなら、ほぼまちがいなく、そうなのだ。

　それにしても……せがれは湖にいる、とは……そりゃあ、湖の底、ってことですかい、と聞き返したかったが、おそろしすぎて、言葉を呑みこんでしまった。

　風雨が荒れ狂う物音は、暗がりで聞くと、いっそう凄まじい。雷はもう一度近いところに落ちてみなを震え上がらせてから徐々に遠ざかっていく気配だったが、湖の対岸の方角へ去っていくと気づいた『かわいや』は、家に残してきた女房はさぞ心細かろうと、口には出さずに気をもんだ。おシゲが少し横になるようにと夜具を運んできたが、とても体を横たえるような気分ではなかった。

　連れの外国人はなにを思うのか、火鉢に赤々と燃える炭をじっと見つめていた。

　夜半を過ぎたころ、ようやく風雨が収まってきた。やがて、別室の神棚の前で一心に祈っていた遠野とめるのが出てきて、雨戸をそろそろと開けて外をみている。

「まあ！」とめるのは静かに歓声をあげた。「月が出てる――満月が――！」

　源三、おシゲ夫婦を留守番に残し、屋敷を出て下方の湖に一同が向かったのは、午前の三時ごろだった。空のところどころに荒れた名残の雲が青白く浮かび、湖は満月に照らされて藍色と金色とにさざめいていた。空気は雨に洗われた植物の匂いを含んで、すがすがしくさえあった。

　船着場近くに茂る葦のむこうに、舟影らしきものを一番に発見したのは、『かわいや』だった。月明りと月光を受けてきらきらと輝く湖面とのはざまに舟の舳先の形が黒く見えていたのだ。月明りがあるとはいえその光線も影も夢の中にいるように現実感に乏しく、昼間の明るさとはまるっきり違う。ほかの者にはそれが舟の舳先だとは、とてもではないが判断できなかった。わが子を捜す父親の執念が見つけさせたのかもしれない。

　彼はうなるような声をあげて葦をかきわけ、泥土に足を突っ込み、こけつまろびつの態で舟にたどりついた。
　真っ先に目に入ったのは、縦に裂けて船底に転がった櫓だ。横腹にも裂け目。からっぽの舟は岸辺にへさきを突っ込んだ姿勢で、ゆっくりと静かに上下に揺れていた。

『かわいや』は「保……」とうめいたきり、へなへなとその場にくず折れた。

015.

「『かわいや』！」

「――へい？」

　がっくりと膝をついている『かわいや』の背後から老婆の声が飛んだ。

「舟を所望じゃ！」

「――湖へ――おでましになるんですかい？」

　とぽんとした表情で振り返る『かわいや』に、竜門渕当主はいらいらと声を張り上げた。

「そうじゃ！　はよせい！　漁に出る者はもう起きておるだろう、舟を貸してもらって来なされ！！」

　その剣幕に、『かわいや』は犬に噛み付かれたように飛び上がり、入ったときと同じようにこけつまろびつして草むらから出てきて、後も見ずに駆け出した。言われたとおり、漁師から舟を貸してもらうために。

　夏も近い五月の明け方は想像以上に早くやってくる。今しがたまでの月夜はみるみる白み、朝の色に変わりだす。

　無我夢中で湖岸の細道を駆けた『かわいや』は、自宅近くの船着場で運良く、漁師の与平をつかまえることができた。シジミ漁に出ようとしていた与平は、『かわいや』の

血相を変えた汗みずくの様子に驚き、「あいすまねえが、いっとき、舟を貸してくれ」という必死の頼みに押し切られた。

『かわいや』は、与平が持っていた長い竹竿もいっしょに借りた。それは湖底をつついて探るシジミ漁には欠かせない道具なのだが、自分にも必要かもしれないとおもったのだ。

　湖上に漕ぎ出した『かわいや』は、いつのまにか自分が濃い霧のなかにいるのに気がついた。雨上がりの空に月やら雲やら浮かんでいたから、てっきり、よく晴れた朝がくるかと思いきや、周囲はなにも見通せないような霧だ。

　この湖を自分の庭のように遊びまわって育った彼の長年の勘からすると、このあたりは水深がかなり深い。与平から借りたシジミ採り用の竿では間に合わないくらい深い。そして、底は泥だ。もしも、こんな場所に人が沈んでしまえば、潜って探したところで見つけ出すのに難儀するだろう――

　竜門渕当主から言われるまま湖岸を駆け足で半周して舟を借りて、漕ぎ出す。そこまではやるべきことがはっきりわかっていたからか、冷静でいられた。冷静に考えていられた。しかし湖上で霧に閉ざされて初めて、腹の底から嗚咽がこみ上げてきた。誰にもはばからず、彼は声をあげて泣いた。

016.

　舟底にうずくまり、どれくらい涙にくれていたものか――

『かわいや』は、なにやら、物音を聞いた。波が舟にあたるような自然の音ではない。なにしろ水音ではなく、ぱん、ぱん……と、人が手をたたくような、かわいた音だった。

　彼はびくっと顔をあげ、あたりを見渡した。霧はまだ深いが、近くに別の舟がいるようではない。

　が、空耳ではなかった。たしかに聞いた。彼は、あっと声をあげた。すぐそこに、大きな、物の影がある。島！　竜門渕の祠を祀っている小島ではないか！

『かわいや』はわれを忘れて舟の上で立ち上がった。舟はぐらっと揺れたが彼は踏んばった。そして口に両手をあて、大声で呼ばわった。「おおおおおい！！」と。

　しばらくの静寂。もう一度、呼ばわろうと、肺にいっぱい息を吸い込んだ時。

「おおおおい！！」自分の声ではない、人声。

「おおおおいぃぃ！！　そこに――いるのか――」と、『かわいや』は声を張り上げた。「そこに――いるのか――保――」

　霧の向こうで、なにかが動いている。人の影が手を振っている。

「ばかやろう――！！　返事しやがれ――！！」

　人影はめちゃくちゃに腕を振り回し、足踏みし、悲鳴のように引きつった声で叫んでいた。「お――おやじ――！」

　舟を借りに駆けて行った『かわいや』が舟に乗って戻り、行方知れずだったせがれの保ノ助を同乗させていたのだから、船着場を行ったり来たりして気をもんでいためるのは驚くやらほっとするやらで、その場に座り込む有様だった。もっとも、竜門渕当主だけは、「どんなもんだ！」と、憎々しいまでの態度で堂々と突っ立っていた。

　保ノ助は傾いた舟から放り出されたあと、風と波で小島まで押し流されたらしい。気がついたら祠の前に打ち上げられていたのだという。溺れる心配はなくなったものの、冷たい雨と風に打たれ、雷に怯え、生きた心地もせず一人で夜を明かした。嵐が去り、ようよう明るくなったところで祠を拝んで柏手を打っていたら、人の呼ばわる声が聞こえたのだった。

　一晩の冒険で保ノ助はすっかり衰弱し、熱を出してもうろうとしかかっていたので、『かわいや』と連れの外国人、保ノ助の一行は、早々に竜門渕家を辞し、舟で家へと帰って行った。

017.

『かわいや』父子と長身の外国人の男が連れ立って、「その節はたいへんお騒がせいたしやした」、と竜門渕家を訪れたのは、それから一週間たってからのことだった。

　この一週間の間に、下働きの源三が山に入り、季節の山菜を採って見舞いに届けてもいたので、そのお礼かたがたであった。

　すっかり元気になった保ノ助との再会を素直に喜んでいる孫娘を横目に、遠野は再び訪れた外国人の男に目をやった。「ところで」と。

「おまえさん、まだいなすったのかい」

　ふたりの中間に座していた『かわいや』は、あたふたと取り成した。「こちらはべるぎーから来た画家さんでして、ラウレンスさんていいやす。しばらくうちの宿に滞在されるんですわ」

「おや。絵描きさんかね」と、遠野はラウレンス氏に目をあてたままお茶をすすった。「べるぎーとは。また遠いとこから。目当ては石かいな」

　遠野の言葉に『かわいや』は目をぱちくりさせた。『目当ては石』とはなんのことだ？

　ラウレンス氏は茶碗を片手に上目遣いで老婆を見た。明るい色の目にはふしぎそうな光があった。
「私は絵描きですから、心に響くものはなんでも描きます。空。風。影。木々。花々。

そう、時には、石も」

　遠野はいきなり言った。「絵描きなら、な」

「え、あの、ご当主、ほんとに絵描きさんなんですよラウレンスさんは。そりゃもう流ちょうにさらさらと描きなさるんで、あたしゃびっくり……」

「んなの、当たり前じゃ。博物学者（※）なら」

「――なぜそうお考えなのです？」、とラウレンス。

「おまえさんからは学者の匂いしかせんからじゃ。べるぎーから船で来たのはほんとじゃが、絵描きなどと、真っ赤なうそっぱち」
　遠野はきっぱりといい、相手を真正面から見た。めるのはあわてて腰を浮かせて割って入った。
「おばあさま！　『かわいや』さんのお客様にそんな、失礼なことを――」

　するとラウレンスはゆっくりと手をあげて、めるのを止めた。

「私、船で来たことは誰にも言ってません。本業は画家ではありません。その通りです。シャーマントオノ」と、いつのまにかずいぶんと流暢になった日本語で受け答えた。

　ふん、と鼻を鳴らした遠野が「わからいでか。わざわざ外国くんだりからこんなとこへやって来るなんてのは、石しかあるまいよ」、さらりとうっちゃると、ラウレンス氏は「ははは！」と楽しそうに笑った。

『かわいや』はとなりにかしこまって座っているせがれを肘でつついてひそひそと尋ねた。（おい、保、しゃーまん、てなんだ？）

　なにやら恐ろし気なやりとりに固まっていた保ノ助もひそひそと答える。（知らねえって）（……妖怪？）（あ……そうかも）

　はしたなくも父子の会話に耳をそばだててていためるのは思わず、ぷっと吹いた。

　※・動物・植物・鉱物（岩石）など、自然科学のすべて

018.

　遠野は孫娘と『かわいや』父子をじろりと横目でにらんで黙らせた。

　「しかし、学者さんや、このあたりが石の調査でにぎわったのはずいぶんと昔のことだ。今じゃすっかり、下火だよ」

「知っています」ラウレンス氏はお茶をひと口飲んだ。
「十七年前、ここ、水つ早（みつは）湖の湖底から大量の黒曜石が見つかった。ひとの手で加工したものだった。ヨーロッパでは水中遺跡の事例はいくつか知られているのですが日本では初めてだったそうですね。ひじょうにショッキングな発見だということで地元はもとより、報せを受けた中央の学会も騒然となった。その後数年の間、地理学者、人類学者、考古学者、鉱物学者らが入れ替わり立ち代わり調査に訪れ、湖畔の小さな田舎町は好事家や研究者であふれかえったと、そのように聞いています」

　ラウレンス氏の話に、保ノ助は思わず「へええ」と口をはさんでしまった。「こんな田舎で？　そんなことあったんだ」

「きみは何歳だっけ、保ノ助？」

「十四ですけど」

「なるほど、きみが生まれる前の話だから、知らないのも無理はない。けれど本当なんだよ。日本のそのニュースが伝わってきた時、私は南フランスにいた。そしてむしょうに、心惹かれた。そこでの仕事が手につかず、上の空になるくらいに。なんとかして日本に行き、その石にこの手で触れてみたい、心からそう思ったよ。しかし……ヨーロッパでは政治情勢がひどく不安定だった。そうこうするうちに、戦争が始まってしまって

ね」

　ラウレンス氏は、心底残念そうにため息をついた。

「もっと、早く来たかった。きみはこの町で生まれ育ったのだろう？　駅前の小間物屋をのぞいてみたことがあるかな？」

　駅前の小間物屋といえば、伊藤商店のことだ、と保ノ助は、たわしだの、ろうそくだの、マッチだの、こまごまとした生活雑貨が置かれたその店先を思い浮かべた。それがどうしたのだろう。

「観光土産が置かれているのだよ。小さな黒曜石の矢じりがボール紙に糸でくくりつけられたのが、ね」

「えーと、それって――」

「世界中、どこへ行ってもそういうことはあるのだ。過去の遺物に価値を見出し、自分だけのものにしたいという人々がかならずいる。だから発掘し、売る人々がいる。研究者の目に触れる前に、貴重な研究対象が手の届かないところへ消えてしまう」

　遠野はあおるようにお茶を口に含んで飲み込んで言った。「生活するということは、理屈じゃないよ」

　ラウレンス氏は片方の眉をちょっと吊り上げ、それから肩をすくめた。

019.

「半年前、私のところへ友人がやってきました。彼の名前はヴァリス、フィンランド人で職業は医師です。ドイツの病院で仕事をしている時に、急病の日本人旅行者が運び込まれ、彼が担当になった。患者は虫垂炎で、ドクトル・ヴァリスの執刀で手術、すぐに良くなり、退院することになりました。その時にお礼だといって、これを――」

　ラウレンス博士は自分の鞄を引き寄せ、底の方から何か取り出した。縦横が五センチと十センチくらい、厚さが二センチほどの、木製の箱。上蓋をとると……中には綿が敷かれ、小さな石が二列……一列に四個ずつ、計八個……に並んでいる。みなは思わず箱を覗き込んだ。

「これをもらったのです。きらきらしたのが混ざっていて、きれいでしょう？　日本土産だそうです。旅先であげると喜ばれるのだといって、その旅行者はまだ幾箱も持っていたそうです」

　めるのは口をはさんだ。「日本土産？」

「ええ、その旅行者は東京の人で、ツルガでウラジオストック行きの船に乗ったとかで、乗船前に買いこんだんだそうですよ。国際港の前で売ってたということは立派に日本土産でしょ」

　博士は言いながら箱に蓋をしてひっくり返して裏を見せた。『水つ早町　尾川商店』と毛筆で書かれていた。つまり、それは……少なくとも木箱は……水つ早町産で、ドイツまで行って戻ってきたというわけである。

「私はいろんな石や金属、輝石も貴金属もみてきたのですが……この赤いのはザクロ石、青いのは蛋白石、それから、これは……」、と博士はきらきらした小さな三角形の

石を指さした。

「黒曜石です。透き通って、青みがかった黒色。美しい！　私は一目で魅せられました。これは産地へ出向いて原石を見てみたい、というわけで、はるばるベルギーからここへやって来ました」

　みなは揃って、「はあ」とうなずいた。『かわいや』の顔には、（ご苦労なこって）、と書いてあった。

「駅を出て、すぐに駅前の小間物屋さんで『尾川商店』はどこかと訪ねたら、ずいぶん前に倒産して店は廃墟になってるという。これは長引くかもしれないと思い、湖が見える、湖の近くの、宿屋さんを紹介してほしいと頼みました。店先に山と湖の絵に文字が入った、ポスターが貼ってあった。何が書いてあるのかと、おかみさんに尋ねたら、『観光案内だんね。水つ早湖へようこそ、って。水つ早ってのは竜神さまの名前だってさね』」

020.

「実はわたくし、ヨコハマに上陸したあとは、トウキョウへ行って、あちこちうろうろしました。どこで何をしてたかって？　情報収集ですよ。十七年前の、湖底から石器が発見されたというニュースは日本国外の新聞にも載るような大ニュースだった。さまざまな分野の学者が集まったといいます。それならトウキョウの新聞社や大学にはなにか資料が残ってるかと思いましてね。

湖底遺跡は大きな議論を呼びました。『広かった湖が狭くなったのだ』『湖にくいを立てて人が住んでいたからに違いない』『単に地滑りや地盤沈下が起きただけだろう』等々。しかし議論は深まるどころか、空転してしまった。遺跡が湖底にあり、実際に現場をみられない。どんな仮説をたてようと、実証の手立てがない。議論を戦わせた人が各界の代表的存在だった。遺跡発見に興奮した現地の人たちがそれぞれのレベルで口々に自説を展開した。理由はいくつも考えられますけれども、結局、興奮は潮が引くように冷めてしまった。それが今の水つ早町です」

　めるのはカラになったラウレンスの茶碗にお茶を注ぎ足す。

「というわけでね、トウキョウでの情報収集は収穫はまるで得られませんでした。正直、がっかりしましたが、せめてお墓参りだけは、と」

「とおっしゃいますと、どなたかお知り合いが？」と、めるの。

「神保博士という学者さんです。ドイツに留学され、私の父がいっしょに勉強してたのです。日本に帰られてからも手紙のやり取りがあった。博士は水つ早湖遺跡発見の報に

いちはやく駆けつけたものの、大学や日本地質学会などの要職に就かれていたため非常に多忙で、深く関わることができず、悔いが残ると父への手紙にあったそうです。昨年、亡くなられたと遺族の方から知らせが……。そんな時でした。友人ヴァリスからこの『おみやげ』を見せられたのは」

　ラウレンスが木箱を傾けると黒や赤や青の光がきらりきらりと躍った。保ノ助は自分の胸がどきっとしたので、びっくりした。

「んでおまえさんは、『水つ早湖の石の謎』を解きに来たというわけかね」
　老婆の乾いた声が問いただす。輝く石の世界にはまりかけた保ノ助の心は現実に引き戻された。

「汽車に揺られながら考えました。私は何をしたいのだろう、とね。水つ早湖からは加工された石がじつに数万個も引き上げられたとか。それらはあっという間に人から人へ渡ってしまい、私が見ることができるのはほんの限られたものにすぎません。湖底に沈んでいた石の全体像をつかむことはもはや不可能です……」

「じゃあなにしに来なすった」
　老婆の声は情けも容赦もなかった。保ノ助はさっきとはちがう、いやな動悸を味わっている。（ばあさん、ラウレンスさんのこと、きらいなのか？）

「水つ早町行きの汽車に乗ること、私はためらいませんでした。そのことに迷いはなかった。水つ早町が私を呼んでいる、そんな気がしてならなかった。だから、行こう、と思いました。ただの旅人として水つ早町を訪問しよう。『かわいや』さんに職業を聞かれ、ウソをつく気はなかった。学者ではない私。ただニュートラルな自分でいたかった。……わかります？」

「ようわからん！」

老婆はばっさりと切り倒し、ラウレンスはがっくりと首を垂れた。

２・「五月の嵐」

３・「鉱物学者ラウレンス」へ続く

あとがき

カメラというものがない時代に、記録と観察のために博物学者は自分で絵を描いた。目的が『記録と観察のため』ですから、見たまんま、ひじょうに写実的です。牧野富太郎、南方熊楠といった名前は読者のみなさまもご存知のことでしょう。あと、平賀源内なんかもそうですし、蘭学で有名なシーボルト、キリル・ラクスマン（1700年代、江戸・宝暦の時代に太平洋で難破しロシアに流れ着いた日本人・大黒屋光太夫が日本に帰れるよう尽力してくれた人）なども博物学者。
近年でも石器研究をしていた人の中には、満足にマル〇も描けないのに、と細密描写を嘆いたり、作業で目をわるくしたり、利き手が効かなくなってしまった例もあるそうです。

2024年10月3日　記

奥付

オリカルクムの記憶

2・五月の嵐

2024年10月10日 初版発行

著者　　峯村　明　E-mail

表紙素材　「月とサカナ」

「素材good」

制作　　Puboo

発行所　　デザインエッグ株式会社